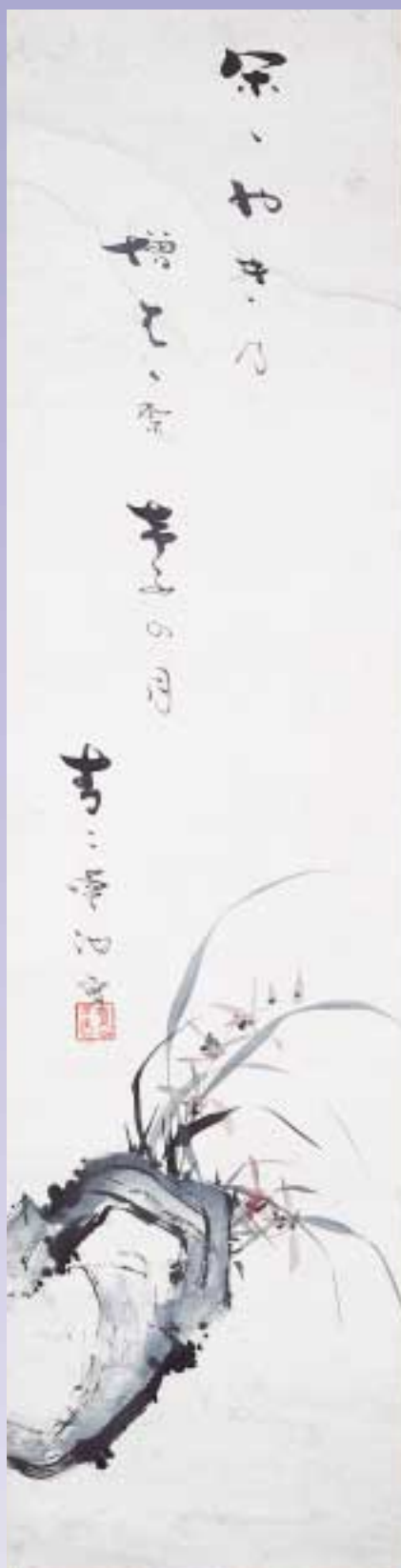


豊田市 郷土資料館 だより

No.33

Toyota City Museum
Of
Local History



かがやきの
増ばかり也けふの月
青々卓池写(印)



鶯の声を
養ふ
清水哉
青々藍叟写(印)



風月や
不ふや
寂しおり
卓池写(印)

目次

・郷土史調査レポート	2
・収蔵資料の紹介	4
・博物館実習レポート	5
・心のふるさと無形民俗文化財・祭り・行事・技	6
・発掘調査速報・拳母藩の御庭焼	7
・文化財シリーズ・資料館ニュース	8

資料はいずれも
鶴田卓池画賛(本文P2参照)
(本館所蔵)

卓池の門人・青可と鷺洞

鶴田卓池(1768～1846)は、江戸時代後期に活躍した岡崎の俳人です。青々処・藍叟といい独特の書体と俳画で全国的にも名を馳せ、天保の四老人(梅室・蒼虬・鳳朗)にも数えられたほどです。17歳の時、名古屋の俳人・暁台に入門しましたが、6年ほどで暁台が亡くなり井上士朗に師事することになりました。



鶴田卓池俳画

作品は平明温雅、一般人にも分かりやすく味わいの深い句が多いといわれています。それはそのまま卓池の人柄をも表しているようで、岡崎天満宮西(現・岡崎市梅園町、弘化元年には菅生蟹沢に庵を新築する)にあった草庵・燕岡庵は彼を慕って訪れる人が絶えなかったといわれています。

こうした人柄から岡崎を中心に三河・尾張をはじめ遠江・駿河・伊勢・信濃に130人以上の門人がいました。現在の豊田市域にも卓池の門人は多く、わかっているのは吾竹(田中氏・上野)、翠嶽(山本氏・中根)、呂文(山本氏・中根)、青可(都筑氏・寺部)、鷺洞(菅沼氏・九久平)、里敬(毛受氏・上野下村新郷)、沾路(松本氏・寺部)、李幹(杉本氏・鷺鴨)、篤司(宇野氏・平藪)といった人物です。今回は、このうち武士であった青可と鷺洞を紹介します。

風雅の武士・青可

寛政8年(1796)寺部村(現・豊田市寺部町)にうまれた青可は本名都筑周鑑、通称晋八郎(はじめ斎治・斎助)といい寺部の領主渡辺家の家臣で10代渡辺規綱に仕えました。規綱の実弟である裏千家11世玄々斎宗室

に茶道を学び虚心斎という号を贈られています。

卓池の門人となった時期はわかりませんが、刈谷の俳人・中島秋挙(1773～1826)の追善集『花済集』に名がみえることから、初め秋挙に学び、没後卓池に師事したと思われます。秋挙と卓池は親友でした。友人の急死に卓池が門人を引き継いだのかも知れません。

文政10年(1827)4月に足助の板倉塞馬と共に卓池に随従して長崎まで旅行し先々でその土地の俳人たちと交流し句を残しています。この頃から卓池編や門人編の句集に青可の句がみられるようになります。

名古屋詰を命じられた青可は、天保6年(1835)『く(注1)にまたぎ』を出版しました。これは諸国俳人の発句331句に卓池との両吟と尾張の俳人伊藤而后との両吟の歌仙2巻を添えたものです。三河から尾張に暮らすようになった自らを記念しての出版で卓池が序文を書いています。これによると「都筑青可は仕官にいとま

あるをりをりわが草庵に來りて、大根おろしの一杯の酒に世塵を忘れ、筑紫行脚の折からは、いとまめやかに心をそへて海陸のちからと成ぬ。」と青可が岡崎の卓池を訪ねて酒を酌み交わしつつ俳諧の話に心を和ませている様子が伺えます。またここからは身分を越えて師を敬い心遣いを見せる青可の



『富士発句集』(天保3年)

「朝夕のしまかけ見へす
ふし岩山」三州寺部 青可

人柄も伺うことができます。

寺部渡辺家の家臣の人事記録簿にあたる分限帳をみると天保7年(1836)2月4日に剃髪し、青可と改名、5月27日に寺部へ引越すと届出があったことが記されています。

これは隠居して家督をゆずり、自らは俳諧・茶道に専念したいという意図があったためでしょう。前年自らが仕えた規綱公が剃髪し、又日庵と号し茶人として

活躍しています。こうした主君の存在は寺部の文化的土壌をつくり庶民文化を高め、青可のような俳人にも活躍の場を与えたことでしょう。

青可は卓池門人・田鳳編『みずおと』に序文を寄せ、卓池古希の記念集『竹春集』、暁台没後50年『円満集』、芭蕉翁150回正当命日の句会記念集『俳諧こぼれ炭集』などに名前が見え、三河俳諧で名声を高めていきました。

慶応元年（1865）4月21日享年70才にて没、寺部町随応院に墓があります。

郷土・雪廣舎鷺洞

鷺洞は本名菅沼左司馬のち彦右衛門・彦衛といい、地名から雪廣舎（現・豊田市九久平町雪広）とも号していました。菅沼家は農民でしたが、領主である旗本鈴木市兵衛から「御譜代之家臣」として武士の格式が与えられた家柄でした。鷺洞は九久平村に置かれた陣屋に国代官として勤めていました。

鷺洞は明治19年（1886）に73才で亡くなっているため文化10年（1813）の生まれと考えられます。先の青可より17才年下となります。卓池の門人としての先輩である青可とは親しく交流していたのでしょう。当館寄託の菅沼家文書に「鷺洞・青可両吟歌仙」が残されています。青可と鷺洞が交互に句を詠み連句とするもので、18句ずつ併せて36句で1つの歌仙となっています。ほかに青可の句を記した懐紙が鷺洞の座右録の中に綴じられていました。



鷺洞・青可両吟歌仙

現在わかっている鷺洞の俳諧関係の資料をみると卓池が添削を施した「初ふゆの句」という句集のほか「雪廣獨吟 百員」と記された句集が4巻あります。「壺ノ巻」「二ノ巻」「四ノ巻」は湖舟に、「三ノ巻」は素月に評価を依頼しています。

このうち「初ふゆの句」をみると卓池が添削をした句が6句、良い句として点（印）を付けたものが16句あ



鷺洞句集「初ふゆの句」

ります。ここから少し鷺洞の句をひろってみると

「水鳥や立ても居れぬ吹さらし」

「時雨ゝや柱にかけし馬の鈴」

情景が素直に表現された素朴な句という印象をうけます。

また卓池が添削した句をひろってみると

「煮こぼるゝ汁のにほひや村時雨」 鷺洞

「煮こぼれし汁のにほひや夕時雨」

卓池が添削した句

「山茶花や日当のよき浄土寺」 鷺洞

「山茶花や日当のよき寺のまへ」

卓池が添削した句

この資料は卓池がどのように添削をしたのか、ふたつの句を比較できる非常に興味深い貴重な資料です。明治19年（1886）12月18日73才で没した鷺洞の墓（九久平町高德寺）には筆子中による碑文があります。明治維新後、村内で俳句の他、読書習字を教えたのでしょう、子弟80余人とあり晩年の様子を伺い知ることができます。

弘化3年（1846）8月10日卓池死亡後、明確な後継者が決まらず卓池の門人は対立により分散してしまい青可・鷺洞とも三河俳諧でのその後の活動についてはよくわかっていません。

江戸時代、豊田市域にはまだまだ知られていない文化人が多く活躍しています。今後も調査を続け紹介していきたいと思います。

（注1）分限帳では天保4年（1833）には広間詰格になっている。

（参照「当館寄託・菅沼家文書」『新編・岡崎市史』・『近世豊田の俳人』『豊田市史』）（伊藤智子）

収蔵資料の紹介

縞本帳

豊田市域は、三河木綿の産地の1つであり、市内でも機織りは女性の手仕事として広く行われてきました。

現在資料館が所蔵する「縞本帳」は市内の方から寄贈を受けた資料ですが、これまで詳しい調査が行われてきませんでした。

そこで今回、市内在住の木綿研究家佐貫 尹氏に資料調査をしていただき、資料の紹介をお願いしました。

豊田市に残る古い縞帳

この古い縞帳とは、天保15年（1844）が明示されている木綿の見本帳です。当時の農家は木綿織りが盛んで、特に縞木綿は後日の参考にと自家で織った端切や知人と交換した小裂などを帳面に貼りつけて縞帳を作りました。

織女にとっては縞帳は財産であり生活の証として常に座右に置きました。この縞帳の表紙には年号とともに「縞本帳」と明記があります。



保管が良く、当地方で織られていた当時の縞木綿を知るうえで貴重な資料として、豊田市郷土資料館で大切に保存されています。以下この縞帳を「天保15年・縞本帳」と呼ぶことにいたします。

天保15年・縞本帳の教えること

大蔵永常は天保15年頃、尾張・三河・遠江あたりで¹⁾織られていた縞木綿を詳細に調査し、『広益国産考』にまとめました。

江戸期の縞木綿を伝承する私どもがその中で特に注目するのは、縞木綿1反を織るのに必要な²⁾経糸と緯糸³⁾の量を細かく規定していることです。私どもはここから当時の縞木綿の織りの要項を試算し、それらの数値を目標に縞木綿の復元を続けているのです。

この立場から「天保15年・縞本帳」を観察してその素晴らしさに目を見張り、江戸末期の豊田市域は美濃・尾張の縞木綿と同品質かそれ以上の高級縞木綿を生産していたことが確かめられました。

縞木綿の評価には縞柄や配色という視点と、柔らかさとしわになりにくさ（糸の太さと織り合わせのバランスの良さ⁴⁾という観点とがあります。これは建物でいえば後者が基礎や土台の堅実さに相当し、前者は外観に例えることができます。江戸期の縞木綿は縞柄や配色に男女の別はなく、またどの地方でも良く似た縞柄や配色でしたから、ここでは後者の観点に立って古い縞帳を比較してみましょう。

表1に掲げる縞帳の小裂の糸はNo.1も含めてみな手紡ぎ糸が使われているので、すべて江戸期の縞帳とみることができます。

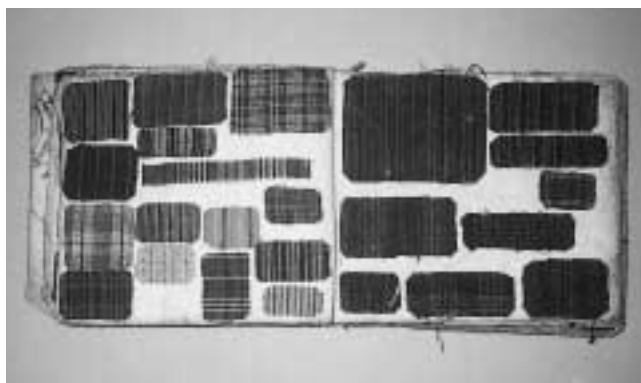
「主流となる経糸密度」、例えばNo.1の19～22本とは、小裂1cmに並ぶ経糸の数を調べて、最も多く出現する密度を出します。その密度を中心に、その前後で

表1. 古い縞帳の手紡ぎ糸の太さと織り合わせバランスの比較 (Textile & Fashion Vol.17 No.1 より)

資料No.	縞帳名	年号	主流となる経糸密度(本/cm)	推定綿糸相当番手('s)	織り合わせのバランスの良さ(%)	調査点数	所蔵
1	尾州縞加々美	不詳	19～22	13～18	42.7	482	一宮市立豊島図書館
2	縞本帳	天保15年(1844)	19～23	13～19	47.1	103	豊田市郷土資料館
3	御縞帳	天保6年(1835)	17～21	11～16	38.5	172	足立康子氏(丹波布技術保存会)
4	縞手本	安政3年(1856)	17～22	11～18	27.5	260	東大阪市郷土博物館

全体の約80%を占める密度の範囲を表しています。そして私どもの研究からこの手紡ぎ系の太さを現在の紡績綿糸の番手法に当てはめて13～18番手と推定し、さらに『広益国産考』に照らして私どもなりに経糸と緯糸の織り合わせ密度のバランスを調べると42.7%の小裂がバランスよく織られていることを示しています。

表1の数字から「天保15年・縞本帳」は調査した4冊の縞帳の中では最も細い糸が使われ、また織り合わせの密度のバランスも最高という結果を得、美濃や尾張の縞木綿と同じ流れを汲むといわれる当地方の縞木綿は、美濃や尾張のそれに優るとも劣らないものであったことが実証されました。



今後の課題とお願い

豊田市には江戸末期の当地方の縞木綿を記録する貴重な資料が保存され、今回その内容の一部を報告する機会が与えられたことに感謝します。

この資料を手がかりに関連する研究機関と連携を保ちつつ、市域を中心にした古い縞帳の発掘と詳しい調査とによって、尾張・三河・遠江の縞木綿の総合的な研究に発展させたいと願っています。

当市局におかれてもこの縞帳に凝集する先人の叡智と努力の跡を市民のみなさまに広く伝えられますよう切望してやみません。

〔注〕

- 1) 大蔵永常『広益国産考』七之巻 安政6年(1859) 復刻版『日本農書全集』第14巻 p.321 農山漁村文化協会(1978年)
- 2) 佐貫 尹・佐貫美奈子『木綿伝承』p.76 染織と生活社(1997年)
- 3) 佐貫 尹・佐貫美奈子『木綿伝承』p.85 前掲注2)
- 4) 大蔵永常『広益国産考』復刻版 p.328 前掲注1)

(木綿伝承工房きぬた 佐貫 尹・佐貫美奈子)

博物館実習レポート

博物館及び博物館相当施設では博物館学芸員の資格取得のために大学生の実習を受け入れています。豊田市郷土資料館では歴史系の大学生を毎年10名ほど受け入れて実習を行っています。今年度の博物館実習は例年よりも多い18名を受け入れ、7月24日から8月1日の7日間にわたって行われました。

初日はオリエンテーションの後、市内の史跡見学をし、舞木廃寺・大給城跡・豊田大塚古墳など6か所をまわりました。

2日目は各種資料の取り扱いや文化財の写真撮影と写真の取り扱い・保存についての講義を実施しました。

3日目以降は2つのグループに分かれて、日替わりで発掘調査・考古資料の整理・民俗資料の整理・展示実務などを行いました。発掘調査は7月から始まった古城遺跡(御立町)に参加し、夏空の下で1日過ごしました。慣れない体験で、大変でしたが、実習生にとって特に印象深い作業となりました。考古資料の整理は昨年度調査していた新金山遺跡(亀首町)の出土品の整理を手伝いました。民俗資料の整理では6月に寄贈され

た民具の整理をし、資料台帳の作成と資料の写真撮影を行いました。展示実務では7月30日に終了した「古絵図」展の撤収作業と常設展示の一部入れ替えの作業をしました。この作業の中では、実際に資料を展示して、キャプション及びパネルの作成も行いました。

また一部の実習生は民具の収集にも参加し、埃まみれになって作業を行っていました。

連日にわたって実習生は展示の舞台裏の作業や、発掘調査・史跡の整備といった野外での作業など多様な学芸業務を体験しました。



民具を整理して資料台帳を作成中の実習生

盆の供養行事 – 練り供養 –

盆行事は夏の代表的な年中行事で、8月13日から15日までの3日間に墓参りや盆供養が市内の各地で行われています。一般に13日は先祖の霊を迎える迎え火をたき、16日は送り火で、今でも盆行事の一つとして続けている家もみられます。



墓地での練り供養（幸町隣松寺）

旧上郷地区の浄土宗の寺院では、盆の3日間に盆施餓鬼とよぶ盆供養が境内墓地で行われます。徳川家康ゆかりの幸町の隣松寺では、13日から15日までの夕方6時から檀家の人も出てお盆の行事があり、故人の墓前におまいります。行事は、本堂で住職と役僧による先祖霊・無縁仏の三界万霊の供養のお経から始まります。20年前から、地元の小学生が一休さんと呼ぶ小僧役を受け持ち、読経の木魚をたたき、墓施餓鬼を行う住職の練り供養のお供役をつとめています。本堂の読経後、導師の住職に従って6人の児童が太鼓、ばち、どらを持って墓地内を一巡します。1人が、賽の目に刻んだナスと水洗いした生米を入れたサトイモの葉の器を持って住職と役僧のお経に合わせて石塔に振りま



餓鬼供養のナスと米まきと鳴り物（隣松寺墓地）

いて歩きます。施主の人は、ほおずき、菊などの花を供え、スイカなどを木の葉にのせて提灯を墓前に飾って合掌して練り供養を待ちます。



幸福寺住職の餓鬼供養（畝部西町阿弥陀堂）

日本の工業化学の先覚者宇都宮三郎の墓所がある畝部西町阿弥陀堂の幸福寺においても14日、15日に盆供養が行われます。夕方の5時頃に施主の人達が盆提灯を飾り、墓前にナス、キュウリ、サツマイモ、スイカなどを、ナス、サトイモ、イチジクの葉にのせて供え、ほおずき、菊などを活けて準備をします。6時から本堂裏の境内墓地の正面の壇で幸福寺住職の読経で盆供養を始め、初盆を迎える故人の名が読み上げられます。



幸福寺本堂裏の墓地での盆供養

この後、住職がサトイモの葉に盛ったナスの賽の目切りを石塔に振りかけて墓地内をまわります。この時に変色陀羅尼經の經文「ノウマクサラバ、タダゲタバロウ、オンサンバラ」をとえします。ナスを振りかけるのは餓鬼に食べさせるためといわれ、住職の供養が終わると提灯と供え物はそれぞれ施主が持ち帰ります。

発掘調査速報

○古城遺跡〔御立町2・11丁目〕
ふるしろ

古城遺跡は県立高校建設と市道建設に先立って、7月から発掘調査を始めています。遺跡は市域中央を流れる矢作川の左岸に位置します。市街から久澄橋を渡ると右手に発掘現場が見えます。昨年度の試掘調査の結果、南北に舌状に伸びる低位段丘5,300㎡に遺跡が広がっていることがわかりました。古城（ふるしろ）という遺跡名は旧字からつけたのですが、遺跡の近くには森城という中世城館があったようです。

8月上旬現在、約2,500㎡を1次調査区として発掘調査を進めており、土師器、須恵器、山茶碗、中近世陶磁器片などが出土しています。また、竪穴住居跡を5軒確認しています。どれも一辺が3m程の方形で小さな竪穴住居です。カマドが造り付けられた痕跡もあり、カマドの破片と木炭痕が確認される部分があります。

重機による表土掘削の時、川原石がたくさん出てくる部分がありました。不思議に思い、その部分を掘り残して人力で清掃してみたのですが、どうやら川原石は平らに並べられていたようなのです。一辺約10mの方形の高まりになり、周溝が巡っていた痕跡もわかり

ました。一体この構築物は何だったのでしょうか。ヒントになる話を地元の方から聞くことができました。現在のような圃場整備がされる前には、今回の調査区のあたりに地蔵堂があったそうです。圃場整備のときにお地蔵様は他の場所に移したそうです。とすると、並べられた川原石は地蔵堂の基礎部分になるのかもしれませんが。

発掘はこれからさらに本格的になっていきます。新たな調査成果が楽しみなところです。



竪穴住居跡を確認

挙母藩の御庭焼

平成4年に行いました挙母城（七州城）の発掘で、「衣製」と読める陰刻のある陶片が一点発見されています。

出土したところは七州城の二の丸南西の小さな谷（現・豊田市美術館噴水付近）からで、大量の陶磁器類や瓦と共に埋められていました。廃城後本丸御殿内の瓦礫や陶器を集めて埋められた遺物と考えられます。

陶片は茶碗の底部で幅3cm、最長部が5cmのほどの小さな破片です。軟質な薄手の作りで、灰色系の釉薬がかかり、素地の鉄分が反応し褐色、赤紫、黄白色が斑に発色しています。直径3.8cmの高台が付き、器の口径、高さともに6～7cm程度と推測されます。同様の破片から数個の碗があったと推測されます。おそらく煎茶の碗と考えられます。陰刻は縦書きの「衣製」の2字を長径1.5、短径1cm余の二重の楕円で囲んでいます。下端部は底面が歪んでいるためか明瞭ではありません。作者の押印による落款でしょう。「衣製」の2字は城内出土、軟質な茶器という点も考え合わせると七州城

内で焼かれたことを示しているのではないのでしょうか。

御庭焼は江戸時代、藩主や富裕な町人が御殿や自邸内で陶工を招いて茶器、什器を焼かせたり、自ら焼いた陶器類をいいます。尾張藩では名古屋城の御深井焼が著名です。

挙母藩においても御庭焼があったと伝えられていますが、確たる実物の製品が見つかっていません。出土の「衣製」の陶片がこの空白を埋めると考えられます。また出土品のなかにはエンゴロとよばれる製陶用具が9点存在していることから、挙母城にも御庭焼があったと考えられます。今後同種の印判のある製品の発見を願ってやみません。





雲版とは、寺で食堂の前などに掛けておき、食事などを知らせる合図のために打ち鳴らす法具の一つです。火版・長板・打板・斎板ともいいます。青銅または鉄の板で、上部の両肩に切れ込みがあり、雲形にできているのでこの名があります。もともとは中国の楽器で、役所で人を集めるのに用いられました。わが国へは、鎌倉時代に禅宗の僧によってもたらされました。

この雲版は、江戸時代中期の元禄9年(1696)、伊保藩主本多忠晴が永福寺に寄進したものです。形状において同種の中で最も優品とされています。

伊保の城下町は、関ヶ原の戦いの後この地の領主になった丹羽氏によって形成されました。丹羽氏が美濃岩村城に転封になると、その後一時、幕府領として三河

文化財シリーズ



うん ばん
雲 版
(市指定文化財)
永福寺

代官鳥山牛助が治めました。そして天和元年(1681)、本多忠晴が所領替えでこの地に陣屋を置き、初代伊保藩主となりました。

本多忠晴は寛永18年(1641)、陸奥白河藩(12万石)の藩主本多忠義の4男として誕生しました。分家後、兄の跡を継ぎ浅川(陸奥高田)藩主となりましたが、転封により伊保の地に來ました。石高は1万石で、宝永2年(1705)には5千石の加増を受けています。永福寺は忠晴が菩提寺として天和3年(1683)に創建した寺です。伊保藩はその後忠晴が遠江相良に所領替えになるまで30年間存続しました。

平成13年2月中旬より開催される郷土資料館特別展では、江戸時代の伊保・拳母・寺部の城下町の紹介とともに、この雲版も公開される予定です。

資料館NEWS

○旧井上家西洋館など3件が登録文化財に指定

7月18日に国の文化財保護審議会が、新たな登録文化財140件の指定を文部大臣に答申しました。豊田市からは、平戸橋町の旧井上家住宅西洋館、喜多町の豊田市青少年相談所(旧愛知県蚕業取締所第9支所)と同所の門の3件が登録文化財に指定されました。登録文化財とは、築50年以上を経た建造物や土木構造物などの近代遺産を対象に、文化財としての価値を認めていく制度です。

今回指定された旧井上家西洋館は、明治初期に名古屋で開かれた地方の博覧会の貴賓館として建てられました。その後移築・改築を経て、平成元年に豊田市が豊田市民芸館内に移築復元し、公開しています。1階部分には連子格子窓、2階には円形のアーチ窓やベランダなどが見られ、和洋折衷型の造りになっています。

また現在の豊田市青少年相談所は、大正11年に建てられた鉄筋コンクリート造り、瓦葺きの平屋建ての建物です。石造の門とともに、鉄筋コンクリート造りでありながら伝統的な和風建築を強く意識した設計になっています。またこの建物は、かつて豊田市が西三河の繭取引の中心地として栄えた面影を伝える、数少ない遺産です。

○田中順三氏が紺綬褒章受章

田中順三氏(埼玉県飯能市在住)は、収集していた縄文土器や土偶、埴輪など279点もの資料を、豊田市郷土資料館にご寄贈くださいました。公益のために私財を提供した功績が国にも認められ、田中氏は本年の春の叙勲において紺綬褒章を受章されました。

田中氏から寄贈された資料の一部は、郷土資料館の常設展示にて公開しています。

利用案内

開館時間 9:00~17:00

休館日 毎週月曜日(祝祭日は開館)、年末年始

入場料 無料(ただし特別展開催中は有料となります)

交通 名鉄「梅坪駅」より南へ 徒歩10分

名鉄「豊田市駅」より北へ 徒歩15分

愛知環状鉄道「新豊田駅」より北へ 徒歩17分

■豊田市郷土資料館だより No.33■

平成12年9月20日発行

編集・発行 豊田市郷土資料館

〒471-0079 豊田市陣中町1-21

☎(0565)32-6561 FAX(0565)34-0095

E-mail: rekihaku-toyota@mwd.biglobe.ne.jp